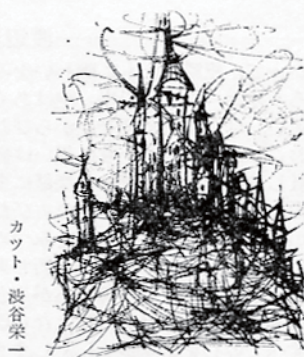


熊谷善正

制作の場は夜、ウィスキーの力を少々借りて……、胃袋にものを入れると頭の回転がニブリ？ 筆が進まないで夜食抜き、夢は夜ひらくと、うがキャンパスの前は「花むしろ、ぼかーしあわせだなあー」といいたいところ。

展覧会場で、もの静かな画面ににじみ出る迫力、微弱なくせにカラいばりして人々をアツといわせるものもある。

制作にあたって迫力ある画面をと思索し、アイディアにめい想するのだが、その正体である創造という美の女神は、思うようにはベールをとらない……。アルコールのいきおいを借りながら、イロイロ口説いては見るのだが……。



カット・熊谷善正

1989年（42歳） 渋谷区

千葉七郎

木版画のそれ、版木、刀、雁皮紙、刷毛、楮紙、墨水、パレン、竹の皮。何と日本の魅力のある非合理的な素材であることか。

版を彫るとき、筆と刀とのたたかひ。私はここに造型の本来的なものを感じる。

摺りは祈りである。せつない祈りにも似た所業だ。

水をくってそり返る版木、のびる紙、木にしみこむ絵の具。かすかな地色をもった日本人の肌のような紙の裏を、パレンがもうれつに走りまわる。

摺りおわると、私はいつも木屑と紙屑のなかにひっくりかえる。そして、摺り上った絵に三拝九拝したい気になる。

しょっちゅう、そんな気持ちになりたいので、私は油絵具をすててしまった。

高橋北修

歩行が不自由になってから、11年目だ。つい歩くのが面倒で、めったに外出したことがない。地方や人の集まりに顔をだすことなど、めったにない。私のながい画生活のうち、手足を悪くしてからは、関係の展覧会や、人の作品に接することがなくなった。自分の作品は発表するが、人の作品に接する機会を失ったことは、栄養をなくした生きもので、自分の制作に当てもはなはだ頼りない。

個性の強い人は、自分以外の仕事を振り向かない。私も、若い時代はそうであったが、現在かなり俗化して、いい作品を見たいと思うようになった。以上の理由で、室内に閉じこもってしまう。今年も、そんな焦せりのなかで制作にとりかかったのだ。

三箇三郎

表現する場合は、自分の尺度にたよるだけですが、それ以外のことは絵画に限らず、自分の尺度に余るものも否定せずに、理解したいと思っています。

新国美津

私は、親しい友人から、よくこんなことをいわれる。「あんたは口のひん曲ったベッチャンコな顔が好きだなあ」と。なるほど、私の作品には、口をブイと曲げすねている子供の首が多い。追い払っても追い払っても、執拗に寄り添ってくるベッチャンコな顔、これには一種の郷愁にも似たセンチメンタリズムがあるのかも知れない。モデルの主人公一人娘素子は、全くびーびーとよや泣く子であった。主婦、職業（塾教師）、彫刻と三役を兼ねた闘争のような生活の中で、更に拍車をかけて、神経をくっつくたにさせた娘なのである。

新制作に初入選の年は、背中へくりつけの制作であったし、モデルになどとは考えてもみなかったのに、小学校へ入って手が離れるようになると、今度は粘土のあるところどこへでも、一つの塊となって追いかけてくるのである。6年生になった娘はいう。「おかあさん、またその子をつくるの？」と。私はふとおかしくなりながらも頬をびしゃりとぶたれたような気がする。脱皮しなければならぬ時期がきたのだと。彫刻にセンチメンタルは許されないのだと。今年もそれを何度か自分にいい聞かせながら制作を続けている。

川上澄生

私の作るものは、いつになっても変らない。南蛮と明治である。おそらく、これは死ぬまで続くであろう。死ぬばそれでおしまいである。南蛮と明治は、私にとって源泉なのである。

山内壮夫

今年の出品作は、野幌に建った開拓記念館の彫刻「羽ばたき」のエスキースです。最初三ツ浮んだテーマのうち、知事の希望もあって北海道の丹頂鶴に決まりました。私は十数年来「鶴の舞」を素材に、いろいろ制作しておりますので、鶴そのものについて、一応の研究はしていたつもりです。が、自由制作と違い、建築の全体構想の中の、一つのポイントになる作品となると、設置される場所の空間条件が、作品の造型上の構成と複雑に関連してきますので、その空間条件のイメージを的確に頭に描かなければならない、至上命令のような枠があります。完成されたときの効果を、空想の計算で出してゆく苦勞は、並大抵ではありませんが、そこにこの種の制作の面白味が湧いてくるものでしょう。



## 渡辺真利

かつて、銀鱗とともに賑わいをみせたこと  
だろうオホーツクの沿岸、空はあくまでも暗  
く重い。今、灰色に痩せひからびた砂丘を掘  
りおこしながら、遠い昔に想いは馳せる。

貧しさに耐え、潮焼けと深皺に歪んだ老夫  
の顔、ふしくれた指先で古びた網を織い  
ながら、時折、じっと遠洋をみつめる眼は儼  
わしく、そしてもの悲しい。朽ち果てた船体  
の傍らに、突如砂躰が舞いあがると、北の海  
は白牙をむき、青緑色の巨大な口はアングリ  
とすべての心を飲みつくしてしまふ。

「北情」がまたひとつ、鋭どく刻み込まれ  
て、心底深く沈黙する。

## 木万寿三

出品制作という、文字どおり展覧会があるから、出品のために制  
作にかかる、というのがいつか常のようになってしまいました。

見てほしい作品ができたから、展覧会に出して発表しようという  
ようでありたいと日頃は思うのですが。

しかし、作品という言葉に耐えうるような作品を生みだすのは、  
これはまた、あだやおろそかなことではない。大変な難作業である  
と思われまふ。

## 一原有徳

メタンの音楽、メタンガスが、空気の仲間になろうと、次々に  
出てゆく自然の音楽を、表現したかった。

## 秋山 進

彫刻家集団「北斗会」第3回展開催を皮切りに、今年のスケジュールがはじ  
まった。2月北斗会展、4月国展、7月全道展、8月新樹会展、11月第2回個  
展とめまぐるしい日程である。私は、制作に際して10日ほどクロッキー、デッ  
サンを続けて、いくつかの小像の制作にかかるのが常で、その中から大作にか  
かれるものを見出す。

今年の作品は動きのある人体、動く人体がもつ生きた美しさを追い、制作に  
とりかかったが、持続できない無理なポーズのため、数分でその動勢はくずれ  
る。そこで、再びクロッキーで瞬時の動勢をつかみとり、印象をなくしないよ  
うにつとめた。

## 原 義行

絵を描き始めたころは、楽しく  
て楽しくて、心おどらせて描いて  
いたように思う。それがいつしか  
楽しさを失い、心のおどりも忘れ  
てしまった。

とうてい、絵描きにはなれそう  
もない自分なのだ。せめて昔のよ  
うに、楽しんで描いていこうとつ  
くづく思うこのごろである。

## 池谷虎一

私の製作といっても、格別ここで申し述べなければならぬような、特異のも  
のではありません。ご覧のとおり、至極平凡です。

絵描きは、結局できた絵がものをいうので、百の名論、卓説を述べても、肝  
心の絵がダメなら、なんにもならぬわけです。出品画は、自宅付近の毎日見馴  
れている風景を、気の向くままに描いたものです。

## 北岡文雄

木版画の制作の過程には、彫りと摺りとい  
うどうしても通らなければならぬ関門があ  
る。これは単に技術上の問題ではなく、彫り  
と摺りを、創作の手段と解釈すべきなので  
ある。

版画の構想が浮んだとき、私は予想された  
効果を得るために、どのように彫り、摺るか  
を考え、色版を摺り合わせる順序の計画を練  
る。計画が出来上がったとき、私の版画は完成  
したといってもよい。しかし、私はいつでも  
幾分か偶然の入り込む余地を残して置く。  
それがその版画の肉づけとなる。偶然性は彫  
りと摺りの過程で、私の作品にうるおいと謎  
を与えてくれるのである。しかし作品の骨格  
は、デッサンで練り上げる以外にないのであ  
る。

## 小野垣哲之助

一昨年、田舎の知人の倉にほこりだらけになっていたランプを見  
つけ、頂戴してきた。

このランプは、いつ頃から北海道で使われてきたものかは知らな  
いが、幼い頃、このランプのホヤみがきをさせられた記憶があるか  
ら、50年はたつていよう。このランプをアトリエにおき、眺めくら  
しているうちにいろいろなイメージが湧き、その展開を楽しむよう  
になってきた。

作品の中でのランプは、時に主役に、またワキ役に廻り、そして  
分解されたりして、作者の興味もまだ当分続きそう。出品作もこ  
の中の一枚になりそうだが、形の面白さを強調するつもりが、なま  
じ思いつきがあるだけに、画面に感傷を呼び込みそうで困っている。

## 八木保次

春は色をやわらかな形にしようとしているが  
光は形になりたがらず

前を向き

後を向き

はげしく暑い夏の山をかくしている



..... 鶴川五郎

人間を信じようとして信じきれないものが、重く背景の中にある。裏切られる辛さが、信じるよりも先にきて、それならばじめから信じない方が安心だと背を向けてしまうのである。

絵画は、人間に対する愛情から出発すべきものと思うが、信じられない人間においては愛は憎悪に変貌する。それも個体としての人間ではなく、群らがった人間、組織された人間と、憎悪を追いつめていくと、最後に勝ち誇って奢る体制がぬつと顔を出す。憎悪はそこで自らを窒息させるばかりに高まる。体制に身売りしてはならないと、画笔を剣に振り立てるが、脆い。所詮は、時代の流跡に残る瓦礫に等しい芸術かもしれない。それでも描いていくというのである。

..... 小川洋子

4年程前の話ですが、ヨーロッパ滞在中、割合ふんだんに覗いて歩いたフランスの寺院のステンド・グラスの異様な美しさに魅せられて以来、制作のモチーフにしております。その感動の一片すらも、満足に描き出すことができないうちに、どんどん月日が経ち、私の内部でステンド・グラスは、ますますあいまいな形態をおびてきました。スケッチブックに、デッサンは以前と変らない姿をとっていますものの、感動の新鮮さが失なわれたのでしょう。

初手の感動を失わず、客観性をもたせて定着させることが、こんなにもむずかしいことであったかと、今更ながら痛感している昨今です。



カット・熊谷善正



カット・八木保次

..... 渋谷栄一

子供が生まれるとき、「生」の驚異に打たれた。そのときから、人間をテーマに制作が始まった。

人間とは描いても描いてもあきतरらない。

人間とは描いても描いても描ききれない。

人間とはなんと素晴らしいものなのだ。

しかし、それが戦争という名のもとに、虫けらのように殺されている。何故だろう。貴重な生命を、何も知らない幼い子の生命を、子供たちが平和に、楽しく生きることのできる楽園を創らなければ

..... 西村徳一

わが家のすぐ上に測量山という山がある。近頃ではテレビ塔が立ち並び、道路は頂上まで舗装されて、車がひっきりなしに走っている。はい気ガスのせいとか、立木もほとんど枯れてしまったが、最近たまたま頂上近くの、もう人の通らなくなった旧道の横に赤い小さな社を見つけた。もっとも、この道が昔は頂上に通じていたので、以前には何度か見かけたことがあるのだが、もうとうの昔になくなってしまったかと思っていただけに、この社を目の前にしたときは意外だった。ただ、舗装道路と古めかしい社とは、まったくちぐはぐな感じである。ここに住みついて山神も、もうきっと逃げだしてしまっただろう。

こんなことを考えながら、出品予定の「森を去る山神」を制作中である。

..... 岸本裕躬

視覚的な形態のリアリティーが、美的空間としての空間的抽象的リアリティーに抽出されてゆくホルムを描きたい。……と、わかるようなわからぬような言葉になってしまいます。

実在性と現実性と、美的空間の総合的タブローをきびしく求めること以外に、どうしても必然性の具現を導き出すことができない実情にあります。

..... 八木伸子

現在の絵に一番執着している作者にとって、過去の絵の持ち出されるのは辛いことだ。しかし、春の美術館の私の出品作を前にM先生がおっしゃった。

『昔の絵の強烈な印象が忘れられません。——頭から血がスーと引いた。25年描いてきて、変わったのは10号が100号になったくらいか。』

絵を描く一番大切な心がうすめられては、空しい画面が残るばかりだ。私は今反省期だと思っている。あわてないでひっそり、私なりの絵を描きたい。

..... 峯田敏郎

彫刻は「カタマリ感」の芸術であるということ、耳にも鼻にもつくほど語りつくされ聞かされ続けてきた。かといってこのことは「もう古くさいもの」「わかりきったこと」として片付けるには、余りにも大きな真理である。今ですらあちらの彫刻は「カタマリ感」の芸術であり、こちらの彫刻は「ムード」の芸術であることで、本質的に、戦いの場にすら立合うこともできずにいる。

彫刻家はクールな、そしてドライな造形家であってよいのだと思う。ムード作家であるより先に、造形家でありたいものをつくづく考えている。具象をめざす私にとって、安易なムードが顔を出すたびに絶望感を味わいながら、それでも毎日造っている。